

執念の自動電気釜

——三並義忠(光伸社前社長)——

台所の革命児

わが国では昔から、「飯も満足に炊けない」と言われるのが、女性にとって最大の恥辱であった。封建時代には、飯の炊き方がまずいという理由で離縁になった人妻さえいるそうだし、現代になってからでも、わずかな数年前までは、新婚早々の家庭などで、飯のまずいことが夫婦喧嘩の原因になったものだ。

「飯を炊くことくらい簡単じゃないか」と、男はだれでも思っている。ところが、これが実際はなかなかむづかしいのである。水かげん、火かげんひとつで、おいしくもなるし、まずくもなる。釜の大きさ、へっついやコンロの構造によっても炊き方が異なる。一級の料理店で客にだすような飯の味は、二十年、三十年の経験をつんだ飯炊きの名人でなければいけない、とまでいわれていたのだ。

ところで、現在はどうであろう？自動電気釜の出現によつて、どこか家庭でも常にはかかした、味も一級料理店並みの飯を食べられるようになった。つまり、「飯も満足に炊けないような女」はひとりもいなくなったのである。なんとこの驚くべき台所の革命であらうか。

本篇の主人公、三並義忠は、この驚くべき変革をなしとげた男である。彼は自動電気釜の発明に、文字通りその一生を捧げたのだ。自分の身はもちろぬ、最愛の妻の生命までもこの発明に捧げているのである。その意味では、本篇は、三並義忠の自動電気釜発明の苦闘記にほかならないのだが、ここでひとまず、この発明に取り組むようになるまでの彼の半生を、幼少時代から探ってみることにしよう。

義忠は、明治四十一年一月八日、愛媛県新浜市中萩村の中農、三並百太郎の長男として生れた。

父の百太郎は、四国四県を通じて彼の右にでるものが

ない、といわれるほどの鉄砲の名人であった。空を飛んでいる鳥を狙うと、一発で二、三羽は撃ち落とすほどの腕前だったという。

幼少時代の義忠は、一風変わった子供であった。子供のくせに子供を相手に遊ぼうとしないのである。彼の遊び仲間はいつも大人であった。大人を相手にいろいろな質問をしたり、挙げ足をとったりする。長いキセルで煙草をスパスバ吸ったり、裸牛を乗りこなして大人たちをびっくりさせる。そんな子供であった。

家の中にある道具や機械類自転車などを、片っ端から分解して組み立てることが好きで、ときには失策も演じた。

あるとき、百太郎が生物のように珍重していた金時計を、宗人の留守にこっそり持ちだしてバラバラに分解すると、再びもののように組み立てて、知らん顔で元の位置に返しておいた。しかし、いくら器用とはいえ、子供の仕事である。自分では完全に組み立てたつもりだったその金時計が、その日から動かなくなってしまう。百太郎はそれが息子の仕業だとわかると、烈火のよう

に「いいかげんに許してやって下さい。お父さんの大切にしている金時計にいたずらしたのはいけないけれど、子供にしてはなかなか器用じゃありませんか。お父さんは鉄砲の名人ですが、この子も機械いじりの名人になるかも知れませんよ」

母のいしが、そう言って百太郎をなだめた。「そういわれてみれば、子供にしては器用なものだな」いくら怒ったところで金時計が動かさずわけでは無い。百太郎は仕方なく笑いながら、息子を見直すような顔ををした。

そんなふうだったから、小学校の終りころになると、義忠は、なんとかして工業関係に自分の生涯の道を求めたい、と思いはじめた。卒業の後を継いだのでは、自分の天分を発揮することができないような気がしたのである。

「お父さん、ぼくを工業学校にやって下さい。将来は機械関係の仕事をしたいんです」

彼は父に懇願した。しかし、百太郎はそれを許さなかった。長男は家を継ぐべきものだ、という理由からである。

こうして、義忠は無理矢理、農業学校に行かされたのだが、彼は在学中、父から学費をもらわなかった。鉄道に勤め、その収入で農業学校に通学した。また自分で養鶏をはじめ、卵を売った金を貯金して、将来にそなえた。彼はどうしても、工業関係に進路を開きたい、という希望を捨てきれなかったのである。こんな気持だから、学校生活もおもしろくない。岡々のうちに一年半ばかり通学したが、ついに我慢しきれなくなって退学してしまった。

彼には、戸川貞吉という叔父があった。義忠が十四歳の時、この叔父をたずねて東京に上ったことがある。叔父は彼に空気銃を買って与えた。義忠にとって、この贈物は生涯忘れられないほどの感激であった。

戸川は後にアメリカに渡るうとする。おりしも日本人排撃の空気が横行していたアメリカでは、移民はもちろん禁止である。やむなく彼は貨物船に乗り込んで、アメリカの港につくと、スキを見つけ脱走の如く棧橋をかけぬける。しかし、警備員がいたらしくこの密入国者を発見した。そうして数十人で、ピストルを発射しながら追いかけてきた。

命からがら彼は山中に逃げ込み、持っていたカツオブシと木の実を食べて十日間ががんばり抜いた。後に彼は米国で農場を経営して成功する。

義忠の進取の気性は、戸川叔父の影響があったのかも知れない。

農業学校を退学した義忠は、叔父の一人、三並実之丞をたよって大阪にでた。

叔父はハムやソーセージを製造していた。小さな町工場ではあったが、彼は日本で最初にハム、ソーセージの製造を手がけたパイオニアであった。

義忠は叔父の食品工場に勤め、働きながら進工業学校に通学した。小学生のときから憧れていた工業の世界に、その第一歩を踏み入れたのである。

しかし、実際に生活してみると、そこは彼にとって、満足して働けるような場所ではなかった。一口に言えば、そこは古い職人の世界であった。義忠の求めているのは、そんな職人仕事をやる場所ではない。思ひままに自分の才能を発揮できるような、近代工業の先端を行く舞台であった。幼少のころから他人に負けることの嫌いだっただけには、古い立ち遅れた世界に安住して、先駆者

の後から指をくわえてついて行くようなことは、とても我慢できなかった。

彼は東京にでた。そして、芝浦工大の前身、芝浦工学校に入学し、卒業すると同時にドイツ系の商社、アンドリュウス社に入社した。ドイツの機械、特に精密機械を日本に売り込んでいた会社だった。

ここでも彼は、出社して二日目には、もう独立の日のことを頭の中に計画している。商品のネジや歯車を測定する顕微鏡測定器などの精密測定器を見ているうちに、



故 三並義忠

ふっと脳裡に浮かんだのである。

これらの測定器は、日本ではまだ国産化されていない。そのため先進国から高い値段で買わされている。平時のときはそれでもよいだろうが、ひとたび戦争でもあれば、こうした精密測定器はほとんど入ってこなくなり、日本の産業はたちまち困るに違いない。日本人は目や勘にたよって加工することが多い。しかし、これからは精密な機械が要求されるだろう。目や勘によって処理できるような時代は、急速に過ぎ去って行きつつあるのだ。よし、おれがやろう。一日も早く、この精密測定器を国産化してやろう。

入社二日目にして、早くもこんな遠大なことを考えているところに、義忠の非凡さや、当時の心意気が窺われる。東大の研究室に通って猛勉強を開始したのは間もなくであった。

ひとりぼっちの船出

義忠が独立したのは、昭和九年、二十八歳のときである。アンドリュウス社に就職して、三年も経っていなかった。

彼は、すでに妻があった。名は「いと」とい、芝浦工学校に在学中、妻は北海道に渡って学校の教師をしながら、学資を送りとどけてくれた。独立にあたっての資金の一部も、彼女が提供してくれたものであった。

昭和九年といえは、世界大恐慌の余波のいまだにさめきらぬ時である。不況の嵐が荒れに荒れて、夥しい企業が破産し、農村では娘の身売りまであらわれるといった悲惨な時代であった。

もっとも、世の成功者には、不況期に独立した人物が意外と多いのである。非凡な才能の持ち主にとっては、不況期こそ世に躍り出る最良のチャンスなのかも知れない。とにかく義忠は、この未曾有の恐慌の真最中に、油田の穂谷町に、光伸舎（すけのや）に光伸精測研究所と改名）を設立した。そして、日本で初めての精密測定器の国産化に乗りだしたのである。たゞひとりの船出であった。ちょうどそのころ、津上製作所が精密測定器の製作に取りかかっているが、義忠は偶然、これと期を一にして事業をはじめたわけである。

しかし、前途は険しかった。

外国商品は水準が高い。しかも、国内に絶対的な信用

うに、次第に国際関係の雲行きがあらしくなっていく、それまで外国から流れ込んでいた精密機械が、急に入らなくなった。

一方、国内では戦局の拡大にともない、航空機製造を頂点とする高精度の精密工業が急に盛んになった。

精密工業には、精密測定器が不可欠である。航空機の製造には必要であるばかりではない。戦車、大砲、軍艦、輸送船などあらゆる分野の製造に欠かすことができない。義忠の製品は、つくってもつくっても注文に追いつけないどころか、ブレミヤムつきで、ほとんど買い求められなかった。そして、やがて軍から軍需工場として指定された。

戦後は、進駐軍にボーイラーや温水器を納めて生きのびたが、やがてドッジ・プランが実施されるにともない、その傾きをくって、いくとも看板を下ろす直前まで追いつめられた。

ふりかえってみると戦時中は軍需一辺倒、戦後は占領軍一辺倒。要するに何時も受注生産一本やりで生きてきた。しかし、世の中は大きく変ってきた。これからは平和産業の時代である。転換を遂げるのは今だと彼は判断

をからえている。これを相手にして、たゞたひとりで独立したばかりの、弱冠二十八歳の青年のつくった精密測定器（商品名ライゼン）が、そう簡単に売れるものではない。経営的にも、技術的にも、彼が一人前として認められるためには、たいへんな努力と忍耐が必要であった。

彼は思いきって、新聞に自分のつくった新製品の広告をだした。効果はほとんどなかったが、この広告を見て、平井という人物が協力を申し込んだ。それが唯一の反響だったといえる。しかし、この唯一の反響が、意外に大きな収穫だったのである。

平井は長年株を手がけてきたりしたが、営業外交の達人であったから、独立早々の義忠にとって、その協力を得たことは非常に有利だった。

そうこうしているうちに、日華事変がはじまった。昭和十二年七月のことである。

事変は、政府の不拡大方針の声明にもかかわらず、次第に大規模になり、長期化して行った。また、それと期を一にして、ヨーロッパにおいてもドイツのオーストリア併合宣言、独ソ不可侵条約、独伊軍事同盟といったふ

する。平和産業で、しかも大衆消費者を得意先とすることにしている？

こう考えた彼はまずテープレコーダーをつくった。現在のソニー、その頃の東京通信工業がテープレコーダーをつくりはじめた同時期であった。続いて十六ミリのトリーキーを完成する。

しかし受注生産で生き抜いてきた彼には、大衆にむけて販売する組織がなかった。必死の努力の効もなく、この壁は遂に抜けなかった。

こうして昭和二十七年・八年ごろから、彼は東京芝浦電気の下請になった。アイロンや電気ストーブなどの電気製品を手がけはじめたのである。

精密測定器ではだれにも負けない自信を持っていたが、電気器具への進出はこのときがはじめてであったから、多少は危機の念がないわけではなかった。

しかし、はじめてみると、電気は意外に面白かった。電気はまるで生きもののようだった。彼は電気を取り扱ってみて、初めて技術者としての本当の喜びに触れたような気がしたのである。

電気に限らず、あらゆる機械について、彼は天才的な

能力を持っていたようだ。

やはりそのことだが、彼は日本に輸入されはじめたばかりの高級車モリスの故障を修理して、周囲の人々を驚嘆させたことがあった。

彼は別に自動車修理の専門家ではない。しかし、凝り性だったから、修理するのが楽しみで中古品の自動車を買っては、それを修理して乗りまわしていた。そのおかげで、自動車の修理なら、どんなことでもこなせるほど上達していたのである。高級車モリスの修理ができたのも不思議ではなかった筈だ。

こんなこともあった。コンターフレックスといえは、当時、世界最高級と折紙をつけられたカメラである。義忠はこのカメラを一台もつていたが、故障してしまつた。方々のカメラ屋に依頼したが、どこに頼んでも修理のできる店が見あたらない。

遂に、彼は自分で分解しはじめた。しかし、さすがにコンターフレックスである。二日間がっつ通しの努力でようやく完成にこぎつけたのである。

を感じた。思わずハッとして、松本の顔を見直した。

「自動式の電気ガマか。義忠はひとりで心に呟いた。そんなガマができたら、確かに便利だ。台所の革命といっても過言ではあるまい。しかし、果たしてそんなものができるのだろうか……」

そうして、果して売れるだろうか？

すでに三菱電機が大正十二年から、ナショナルが昭和二十六年より、ともに非自動式ながら直炊きの電気炊飯器を完成している。しかし、それはほとんど世の中に普及されていないのである。

彼は目の前にいる松本たちが、急に遠去かって行くような気持で、そんなことを考えていた。

発明というものは、研究に着手する前から百パーセントの勝算があるものではない。従って発明家は、おぼろげな勝算と、なんとしてでも成功してみせろという決意だけで、研究に取り組むのである。その意味では、発明家の心意気は、「わが辞書には不可能という言葉はない」と言ったナポレオン一世の気概と似ている。なせばなる。人間の行くところ不可能なことはない筈だ。そういう信念の持ち主でなければ発明家ではないとも言える。

初めチヨロチヨロ、中パッパ

すでに昭和二十一年光伸社東京製作所と名を改めていたが、続いて昭和二十七年(株)光伸社と改める。そのころ彼は、圧力ガマを研究していた。戦後も七年経ち、日本人の生活にゆとりがでてくるにつれて、その食生活も次第に変貌を遂げはじめていた。圧力ガマはそういう時代の要求によって出現してきたのであった。

そんなある日、義忠は東京芝浦電気松本家庭電器部長を訪ねた。事務室の一角で山田正吾開発課長(現東芝商事冷蔵庫営業部長)を加えた三人で、雑談を交していた。話題は自然と研究中の圧力ガマに集中し、しばらくそれが続いた。

その雑談がきつと途切れたとき、松本がふと思いついたかのようぞ、

「圧力ガマもいいが、飯が電気で炊けて、しかも自動的に炊けるガマができたなら、台所の革命になるだろう。大当りするにちがいないよ」と言った。

義忠はそれを聞いたとき、頭の中になにか閃めくもの

を感じた。義忠が自動電気釜の研究に着手したときも例外ではない。勝算は五分五分に思えた。いや、それ以下のようにも感じられた。しかし、彼は自分の発明欲の琴線に触れたそのアイデアを捨てる気にはなれなかった。

彼はまず手はじめに、一般料理店の飯炊きの名人が、どのようにしておいしい飯を炊いているかを、科学的に分析してみた。そして、「なるほど」と思った。日本には昔から、「初めチヨロチヨロ、なかパッパ、赤子が泣いても蓋取るな」という飯炊きについての教訓がある。名人たちはみなこの教えに従って飯を炊いている、ということがわかったのである。

また、「ワラで炊いた飯はうまい」ともいわれている。ワラの残り火は、徐々にその熱を失って行くので、カマの中の飯が長時間むさされることになり、これがおいしい飯をつくる原因になる。そんなこともわかった。

義忠はそれらを整理して、「初めはチヨロチヨロと燃える弱い火で、中間はボウボウ燃える強い火で炊き、最後は保温しながら、徐々に温度を下げて行く」のが飯炊きの原理だ、と思った。

そこで彼は、その原理を数学でとらえる研究をはじめ

た。電気に人間と同じ働きをさせるためには、正確な計算が必要だからである。どのくらいの水を加え、どのような温度経過で、どのくらいの時間をかければ、最もおいしい飯が炊けるか。これを数字で正確にとらえることは容易ではなかった。

マキやガスを使って何度も飯を炊き、温度の経過を一分計で正確に調べる。次ぎはこれを機械に自動的に炊かせるための構造の研究である。研究のツツのヤマはスイッチであった。一定の温度で一定時間経過させて、自動的に炊けるスイッチを考案しなければならぬ。

彼は戦後、進駐軍に温水器を納入したが、この温水器の自動スイッチはベローズであった。ベローズの収縮で切れるようになっている。しかし、自動釜ではベローズは無理であった。

そうすると、バイメタルである。金属をはり合わせて作ってあり、温度の変化で微妙な作用をするのがバイメタルだ。彼は市販品を買ってきて、自動電気釜に合うようにいろいろ形を変えてみた。このバイメタルをいかに使えばよいか。これが電気関係の研究のポイントであった。

でも使われるのだ、と思うと、冷たい痛いのといっではいられない。ちぎれるような指先で電気のスイッチを入れる。

温度の記録をとるのは妻の役目である。五尺三寸五分、ふだんは綿着でひとに好かれるタイプの義忠だが、研究に取り組んでいるときはまるで別人のようである。

目はらんと光り、無駄口をひとこと入れる。隙もない。大寒の夜はしんと更けて行く。ときどき自動車の排気音と犬の遠吠えが聞えるが、それが止むとあたりは死の静けさにつつまれる。黙々とカマの変化を見詰めている義忠の姿に、妻は鬼気の迫るのを覚える。そんな夜もいくたびあった。

そうかと思うと、真夏の午後、義忠がバソソひとつになつて、したたる汗も拭わずに庭に飛び出すことがあった。そんなときでも、妻はメモ帳にペンを走らせながら夫に従うのであった。

失敗、失敗、また失敗。

それでも、毎日、ほんのわずかずつ前進した。

「ゆうべの実験のデータはこれだ」

朝出社すると、義忠は研究スタッフに、昨夜妻が記録

一日一俵の飯を炊く

次ぎの研究のヤマは、どのような構造にすれば理想的な保温ができるか、という問題であった。急に下げれば十分にむせない。強過ぎれば焦げつく、気候や地域による温度差を克服して、全国どこでも同じ味の飯を炊くには、どんな保温構造にすればよいか。

初めは下部のヒーターの台を厚くしてみた。この台に保温の役をさせようとしたのである。しかし、実験してみると、下部の方だけは保温できるが、上部の方は急激に温度が下って保温の役をなさないのであった。

夜となく、昼となく、義忠の研究は続いた。真冬も真夏もなく続いた。

大寒の夜でも実験は休まなかった。泥のように疲れて布団に入ったばかりの義忠が、急にむっくりと起きあがる。

「おい、起きて手伝え」

彼は妻の風鈴子を叩き起こして、夜中の庭にでる。一升の米を試作中のカマに入れる。水につけると、手が焼けるように痛む。しかし、電気ガマは極寒の雪国の家庭

した資料を渡した。それから、彼の指示に従ってただちに試作にかかると。

研究スタッフは、夜の十時前に家に帰れるということなど、めつたになかった。そればかりではない。ときどき、義忠が屋敷だけでなく、夕食まで忘れて研究に没頭していることがあり、それにはみんな閉口した。なにか疑問点があると、異様に瞳を光らせながら何時間でもじっと考え続ける義忠だった。いい加減に途中で妥協するということとは絶対になかった。疑問が水解するまで退くことを知らない。飯どころではないのである。彼が食べないで、他の研究員も食べざるわけにいかない。グーグーと鳴る空腹を無理にバンドでしめて押えて我慢している。二食をぬいて夜の十時ごろ、

「なんだか、きょうは腹がへつたな」

義忠は不思議そうに言うのであった。

また、研究をすすめて行くためのひとつの障害は、米の調達であった。二十九年、三十年ころは、まだ米が自由に買えなかった。一升や二升ならどうでもよかったが、なにせ一日に一俵くらい実験のために炊くのである。十回、十五回はふつうで、甚だしいときは二十回くらい炊

く。この米をすべてヤミ屋かつぎ屋から買わなければならなかった。

おいしい飯を炊くだけが実験ではない。固い飯、やわらかい飯、いろいろと試みてみる必要があった。従って、食べられる飯と食べられない飯ができた。

当時、光伸社には百八十名ほどの従業員がいた。彼らに実験で炊いた飯を食べてもらう、それも実験のひとつであった。初めの方は喜ばれたが、固くて胃をこわしそうな飯や、おかゆのようなベトベトした飯には、だんだんとだれも手をださなくなった。この残飯の処理にはほとんど困り抜いたものである。

また、そのころの企業界の運命は、すべてこの自動釜の成否にかかっていた。電気ストーブやコンロの製作は続けられていたが、経営状態はあまりよくなかったからである。一日も早く発明に成功し、その事業化によって企業を安定させなければ、活路は見出せないという状況にあった。その面からも、義忠にとっては、毎日が必死の闘いであった。

彼は自宅も工場も不動産も、すべてを抵当にして銀行から資金を借りていた。

十分の間に、北海道でも九州でも、真夏でも真冬でも、飯炊きの名人が炊いたと同じ味の飯が、日本中どの家庭においても簡単に炊くことができるようになったのである。ときに昭和三十年八月、三年間にわたる凄絶ともいえる苦闘の末であった。

義忠夫婦や研究スタッフはもうろく、全社員が感激の涙にくれたのは言うまでもない。

義忠は、完成した自動電気釜を持って東芝を訪れると、涙ながらに松本や山田に見せる。三人は手を取って喜びあった。

「特許は松本さんの名前にして下さい」

「いやとんでもない。あなたが苦心して完成されたものではないませんか」

「いや、松本さんや山田さんのご協力のおかげでございます。それに私は日本の主婦のために、この製品をつくったのです。社会のため、ひいては国家のためになれば、特許など、誰の名義でも結構ですが……」

こうして美しいやりとりの結果、特許は義忠と東芝の共同名義として申請されたのである。

かくて新製品は、東芝で昭和三十年十二月十日に発表

完成はしたけれど

試作品ができることに、彼は東芝の松本や山田のところに持って行って、経過の報告のかたわら批判をおくのを常とした。

こうして、研究は一步步完成に向かって近づいて行く。

頭脳につかれを覚え弾力性を失っていくと彼はポインター種の愛犬を連れて散歩をした。大は孤独な発明家にとつて最上の友人であった。

あるいは義太夫によって一ときを過ごすこともあった。素人大会で日本一になったほどの名手である。美声は聞く人をうならせた。

こんな悪戦苦闘のはて、バイメタルが東芝の協力もあつて、ようやく解決。また、最も重要なポイントだった保温のための構造は、三重ガマが考案されて解決した。外ガマと内ガマの中間に入っている空気が、飯を炊いているうちに熱せられ、スイッチが切れた後の保温の役をする、というこの二重ガマの考案が、ついに悲願の自動電気釜の発明を成功に導いたのであった。こうして、三

された。

しかし、当初三十個の生産を予定されていたが、発売時に用意された完成品は、僅かに四百個であった。これは、過去において三菱や松下の失敗の歴史からみて、おそらく売れないと見られたからである。東芝の社内にも「寝ていて飯を炊く女を女房に持たない奴がいるものか」と反対するものまであった。しかし、松本や山田等が懸命になって説得、販売にまでこぎつけてくれたのである。

この新製品が発売された早々、雑誌『暮らしの手帖』がこの電気自動釜を便利なようて不便な商品として、こっぴどくこきおろした。

東芝の山田正吾はこの時、新しい売り方を考案した。電力会社の協力を求めたのである。

ようやく電力も豊富になり、電力の消費量をたかめる対策を必要としてきた時であったから、山田の話聞いて、電力会社の首脳は大乗気になった。

山田は、全国を巡って、主婦を前に美演つきの講習会を開催し、「お釜の山さん」といわれるほどの獅子奮迅の活躍を演じた。

こうして、三十一年度は毎月一千個、翌年は毎月二万個、そして月二十万個のペースにむかって、ものすごいばかりの普及ぶりを見せはじめたのである。

ここに日本における台所革命の大幕が切られることになったのである。

すると、そこに予想もしない障害が待ち伏せていたのである。

家庭電気製品の某大手メーカーが、異議の申し立てをしたのだ。自動電気釜のものがいばかりの売れ行きにより、彼等の牙城に東芝が自然に喰い込み形になってきたからである。相手は世界のトップ企業と肩をならべる大資本である。ここに、三並義忠、東芝対某家庭電器メーカーの間で、はげしい攻防がはじまるのである。

『好事魔多し』というが、それから間もなく、第二の試験がおそいかる。昭和三十三年、光伸社は、日本一長いといわれた記録的なストライキに見舞われたのであった。義忠は不眠不休で工作につとめた。が、成果は思うようにあがらなかった。

義忠の妻風美子が高血圧で倒れ、病床に臥す身になったのは、そんなときだった。長年の無理がたたって健康

をそこねたのである。

義忠は会社のストライキも気になったが、それ以上に妻の病気が案じられた。彼には妻の病気の原因が、痛いほどよくわかっていった。妻は自分の研究の犠牲になったのだ。真冬の夜の庭でも、真夏の太陽の下でも、妻は自分のために献身的に奉仕してくれた。その無理がたたって病気になるのだ、と思うにつけ、妻が全快するまでずっと傍について看病してやりたかった。しかし、現実はそのことを彼に許してはくれなかったのである。

会社ではストライキの嵐が吹き荒れていた。家の中では最愛の妻が病床に臥していた。義忠にとっては、体を二つに切断したいような毎日だった。

そんな無理な生活が健康に悪影響を及ぼさない筈がない。ある日、突風のように彼の頭上にも病魔が襲った。大量の血を吐いて倒れてしまったのである。瀕死の重態であった。自動電気釜をこの世に送り出すのとひきかえに、産みの親は死の床にいたのだ。

義忠の病氣は十二指腸潰瘍だった。

一時は絶望と思われたが、奇跡的に命だけはとりとめた。

妻は痛くして泣いた。外国旅行に行くことより、夫の優しい言葉が嬉しいらしい。

しかし、楽しみに待っています、と言った妻は、義忠の期待も空しく、再び起ちあがることができなかった。昭和三十四年一月二十四日、眠るように静かに息をひきとったのである。

二日後、妻の葬式の日、特許庁から、異議申し立てを却下し、正式に義忠東芝側の発明として特許を承認する、という通知が届いた。

「これが二日早く届いていたら、生きているうちに見ることができたのに……」

義忠は仏前に承認通知書供えて、心から妻の冥福を祈った。いまだながら、妻の献身的な奉仕がなかったとしたら、自動電気釜はこの世に生れなかったに違いない、という認識を深め、発明家の自分と結婚したために、苦勞ばかり多くて楽しみの少なかった妻の生涯が、哀れに思われて仕方なかった。すると、なぜともなく、発明というものが、ひどく恐ろしいものに感じられた。自分はこの数年、すべてを忘れて自動電気釜の発明に生命をかけてきた。しかし、そんな苦勞をして完成した

発明品が、自分に対して、いったいなにを酬いてくれたらうか。所詮は、最愛の妻を失い、自分もまた大病をして生命をすりへらしただけではないか。なんという空しい行為であらうか。なんというはかない努力であらうか。

義忠は妻の霊前にうずくまって、名状しがたい悔恨の涙を流していた。涙はとどきもなく、頬を伝って流れた。

義忠の挙動にノイローゼの症状が現れたのは、それから間もなくであった。

妻の没後、彼は再び人間の社会に戻って行くことはしなかった。そして、朝な夕な仏壇の前に端座して、経文を唱えながら、妻の冥福を祈り続けていたが、やがてハイキンソン氏病の徴候があらわれ、治療の甲斐もなく、ついに運動神経が完全におかされてしまったのである。学者や作家や発明家のように頭脳を酷使する人々のかかりやすい病気ではあるが、義忠の場合は果たして頭脳の酷使だけが原因であらうか。最愛の妻を発明の犠牲に捧げたという人間的な苦悩が、彼を異常の世界にまで追いつめたのではないだろうか。しかし、いまはすでにそれ

を確める手段も機会もない。

昭和四十一年九月一日、一代の発明家、三並義忠は、妻のあとを追うように、静かにこの世から去って行ったのである。享年五十八歳であった。

死のすこし前であった。義忠はよく足をふみしめつつ、東芝に松本と山田の二人をたずねた。今生の別れを告げるためであった。

すでにその旨は意の如く動こうしなかった。

「あの世にいく前に、ぜひお二人にお礼を申し上げたいと思って――」

語尾は声にならなかった。三人は手をとりあったまま黙然として、おたがいの目を見つめて動こうとしなかった。

踏障と帰途につく義忠の背には、すでに往年の血気も執念のかけらも無く、蜉蝣のはかなさと、悲しみだけがただよっていた。

発明家にも思われた人物もいるし、恵まれない人物もいる。しかし、発明家の本快は、自分が酬いられることではなく、その発明がいかに人間の生活に貢献したかという点である。その意味では、三並義忠もまた思まれ

た発明家のひとりといえるであらう。

後記——光伸社は現在、従業員四百名、年商十二億円

家庭電気器具、事務用品、医療美容器具、ペーシング等を生産、長男の義忠が社長として後を継承して発展を続けている。

なお、三並義忠は生前、科学技術庁長官賞、商工大臣賞等を受賞している。